



年寄り歩

き

川崎ゆきお

「歩き方がおかしくなるでしょ」

喫茶店の窓から表通りを見ながら男が言う。

「本当ですねえ。まだ若そうなのですが」

「老人の歩き方でしょ。あの人はまだ四十代だ」

「そうですねえ、休みなので、遊びに行くところでしょうか、山とか」

「リュックでしょ」

「えっ」

「あれがいけないんです。よくご覧なさい。ほらまた向こうから中年の男性が来ましたよ。見ていてください」

こちらもリュックを背負った男が通り過ぎていく。横から見ると分かりにくいですが、正面から見ると言ってることがよく分かる。

「ぶれてるでしょ。最初から疲れているような歩き方だ。あれはリュックが悪いんだ。その横を歩いているショルダーの人や、手提げの人をご覧なさい。年相応の歩き方でしょ」

「そうですねえ」

「歩き方が軽やかではない。足が開き、がに股のようになってます。一步一步が足を棒のように伸ばしている。足が重く、左右にぶれている」

「よく気付きましたねえ」

「この喫茶店の窓から毎日見ていると、それが分かりますよ。さすがに二十代の方はリュックでもぶれない。しかし、四十代を過ぎたあたりから、怪しくなります。年寄り臭い歩き方になっているんですね。肩や腕の振り方も大きく、しかもぎこちない。まるでボートでも漕いでいるようにね」

「はい」

「ほら、また来ましたよ。お年寄りの二人連れだ。元気そうで体格もがっちりしている方の人、ふらついてるでしょ。リュックですよ。横の小柄で細い老人、肩に薬入れのような鞆をぶらんと提げていますね。違いがはっきり分かるでしょ」

「はい、元気そうなお年寄りの方が大きくぶれています。歩くのも大層そうな、相撲取りが四股を踏んでいるような」

「ああして、背中に負荷をかけると、重心を上手く取れなくなります。振りにくいのですね。あ

れが山道の坂なら分かりません。足が重くても当然ですからね。平地だと、それが分かる。こういう市街地じゃなおさらだ」

「要するにリュックを背負っている人の方が歩くスタイルが悪く、より年寄り臭くなると」

「そうです。ただし、リュックを背負うのではなく、肩掛けなら別です。多少ぶら下がりますからねえ。左右前後に振れるのが分かります。それで、重さを逃がしているのです。ところが、リュックだと逃げ場がない。結局背中や肩の筋肉、胸や腹筋まで動員して力で押さえ込んでいるのです。それがしんどくなると、ブレ始め、足が開き加減になり、一步一步が重く、よたよたとなる。若い人は、筋肉で食い止められますが」

「ああ、それで、リュックなのに、手にぶら下げたりしている人いますねえ」

「手提げ鞆もそうでしょ。持つのが重くていやになると、頭に乗せる」

「ありました。子供の頃」

「しかし、小学生のように体と不釣り合いなリュックだと、逃げ場がない。それで、胸のところで抱いたりしますよ。アコーディオンのように。それほど長い通学距離じゃないので、何とかできるのでしょねえ」

「リュックがお嫌いですか」

「リュックはいけない。そう思わないとね」

「思う」

「そう」

「実際は違うのでしょ」

「そうかもしれないが、私、リュックが嫌いだ。苦手だ」

「どうしてですか」

「見れば分かるだろ」

男はかなりの撫で肩だった。

了